

第269回 今月読んだ本
福本和夫 思想の再解釈
—「福本イズム」から「日本ルネッサンス史論」へ（22）

第10章 「日本ルネッサンス史論」の完成 (1967-1969)

1967年10月に『日本ルネッサンス史論—1661-1850年に至る日本ルネッサンスの比較・総合研究 総論編』（東西書房、以下『総論編』）、さらに1969年9月には『日本ルネッサンス史論 続篇15章』（日本ルネッサンス史学会、以下『続篇』）が刊行された。『総論編』と『続篇』を合わせると65章から成る膨大な著作である。釧路刑務所に在獄中の1936年に着想を得てから30年以上を経て、ついに日本ルネッサンス史論を江湖に問うことになったのである。

前章まで日本ルネッサンス史論への途を辿ってきた筆者は、そびえ立つ峻険な未踏の岩峰を目の前にして途方に暮れている。どのルートから登り始めればよいのか、皆目見当がつかないのである。

お茶を濁したような何となくわかったふりの解説で終わらせることもできよう。それでは、福本思想の全体像を描き出そうとする本稿の目的からは大きく逸れてしまう。日本ルネッサンス史論のすべてを論じられなくとも、その雰囲気だけは伝えたい。

そこで、何が書いてあるのか（各章タイトル）、何のために書いたのか、どのように読まれたか、具体的な内容はどのようなものか、の4つのパートに分けて論じてみたい。（「ルネッサンス」と表記されることが多いが、ここでは福本に従って「ルネッサンス」を用いることにする。）

1 何が書いてあるのか（各章タイトル）

『総論編』は、1985年に刊行された法政大学出版局版（828頁）を底本として『福本和夫著作集 第9巻 日本ルネッサンス論』（769頁+索引33頁、こぶし書房、2009年）に収録されている。

各章のタイトルは次のとおりである。頁数（底本）を付したのは、何を重点的に論じたかったのかの指標になるからである。本来は各章の節のタイトルも列挙したいところだが、長い章にもなると20以上の節からなるために断念した。なお、第4節では各章の梗概を記すことにする。

『総論編』
自序（4頁）

自序追記	(1頁)
尾佐竹・竹越両先生にささげることば	(4頁)
第1章	序説 (43頁)
第2章	日本ルネッサンスの時代性・階級性・革新性 (38頁)
第3章	ルネッサンスの原義と内容 (12頁)
第4章	日本ルネッサンス文化の諸法則 (6頁)
第5章	日本近世学芸復興期論前史—私の日本ルネッサンス史論の位置づけ (29頁)
第6章	ルネッサンス期に先行した航海貿易の発達 (27頁)
第7章	日本ルネッサンスと鉱山業・鉱山学・貨幣流通 (9頁)
第8章	沿岸航路・近海廻船の開拓 (5頁)
第9章	朱子学にたいする復古儒学その他の抗争とその反動 (40頁)
第10章	国学の勃興とその行きすぎ (17頁)
第11章	歌道復古論の諸形態とその系列 (11頁)
第12章	国学者列伝における奇才の双璧 (12頁)
第13章	後世方におこった古医方の復古生新 (39頁)
第14章	折衷医学派の発生 (3頁)
第15章	和方家の発生とその内容の検討 (3頁)
第16章	兵学復興 (19頁)
第17章	法学復興—ルネッサンス・イタリアの法学復興と比較して (7頁)
第18章	ルネッサンス期に発達した史学・史観の検討 (16頁)
第19章	和算の発展とその限界性 (8頁)
第20章	カラクリ技術の復興と普及 (16頁)
第21章	火浣布製法の復興・風炮法の発明・その他 (3頁)
第22章	日本に錬金術がおこなわれなかったことの意味するもの (24頁)
第23章	博物学の勃興と物産会の開催 (30頁)
第24章	伊能忠敬による日本近海実測図の完成—ならびに、その前後周辺 (7頁)
第25章	北斎筆「黎明の紅富士」とその前後周辺 (46頁)
第26章	日本ルネッサンスの印刷術と中国・朝鮮・西洋との比較 (39頁)
第27章	商業資本と商人の是認論を積極的に唱えた人々の系列 (7頁)
第28章	田能村竹田と詩余ならびに煎茶会 (21頁)

- 第29章 異色の学者6人―貝原、田中、富永、三浦、鷹見、鈴木 (5頁)
- 第30章 小説家西鶴と馬琴の対比 (35頁)
- 第31章 談林俳諧から芭蕉・蕪村の俳句まで (11頁)
- 第32章 滑稽・諧謔を旨とした大坂狂歌と皮肉・風刺を主とした江戸狂歌 (5頁)
- 第33章 近松門左衛門と竹田出雲の戯曲 (3頁)
- 第34章 源内の戯作『風流志道軒伝』を中心に (4頁)
- 第35章 山椒のような辛みをもった五七五の社会詩 (3頁)
- 第36章 書体・書風の変遷と復古生新の法則 (41頁)
- 第37章 ルネッサンス中期におこった考証学とその3系列 (5頁)
- 第38章 各種辞典類の続出 (5頁)
- 第39章 日本ルネッサンスの勃興・発展とその反動・抑圧 (7頁)
- 第40章 八代将軍吉宗の政治施策を検討する (5頁)
- 第41章 蘭学伝来の意味するもの (8頁)
- 第42章 造船・公開技術の復興論並びに開国論の擡頭 (6頁)
- 第43章 百姓一揆・都市の打ちこわし・抜け参り (29頁)
- 第44章 日本ルネッサンス期のユートピスト (32頁)
- 第45章 日本の近世史にはルネッサンス時代のあったことの傍証 (28頁)
- 第46章 明代・清代の中国にルネッサンス期があったか (13頁)
- 第47章 中国の明代・清代にルネッサンスがなかったことの傍証 (16頁)
- 第48章 ルネッサンス期に次いで日本にも啓蒙期があった (17頁)
- 第49章 わがルネッサンスが国内に与えた影響 (14頁)
- 第50章 わがルネッサンスが海外に与えた影響 (41頁)
- あとがき (4頁)

『続篇』は『福本和夫著作集 第10巻 自主性・人間性の回復をめざして』（こぶし書房、2010年）の第Ⅱ部（335―614頁）に、第6～8章、第14章は『著作集 第6巻 中国思想の位相論』（こぶし書房、2009年）に所収されている。

『続篇』

- 第1章 日本ルネッサンス史論着想の動機ないし背景と此の史論の実践的意義 (第10巻、44頁)

- 第2章 着想から大成前後にかけての略年譜 (第10巻、11頁)
- 第3章 帝国ロシアにも中国の明代・清代にも本格的なルネッサンス時代はなかった—その結果は (第10巻、44頁)
- 第4章 朱印船貿易家中の異色島井宗室のこと (第10巻、2頁)
- 第5章 我がルネッサンス期並びに啓蒙思潮期におけるマニュファクチュアの発展 (第10巻、22頁)
- 第6章 日本ルネッサンスの書家2、3について (第6巻、11頁)
- 第7章 米元章の書における多様性・複雑性と復古生新 (第6巻、14頁)
- 第8章 孫過庭の『書譜』と姜堯章の『続書譜』 (第6巻、15頁)
- 第9章 印刷術発展の比較研究余話 (第10巻、45頁)
- 第10章 共に啓蒙思潮家で『西国立志論』、「徳意大意」の中村敬宇と「百学連環論」の西周を比較・対照しながら検討する (第10巻、12頁)
- 第11章 ルネッサンス期並びに啓蒙思潮期と百科辞典の編纂 (第10巻、22頁)
- 第12章 幕府がキリシタンを暴圧した政策の再検討—それから引き出さるべき歴史的教訓 (第10巻、7頁)
- 第13章 明治維新・明治国家・明治憲法論序説 (第10巻、54頁)
- 第14章 先秦の法家韓非子とイタリー・ルネッサンスの国家論・政略論・戦術論のマキアヴェリ (第6巻、15頁)
- 第15章 チェコの新路線「社会主義ルネッサンス」の目指すところとその世界史的意義 (第10巻、41頁)

2 何のために書いたのか—ルネッサンス史論の部分史としてのマニュファクチュア史論

ルネッサンスとは何か。この問いについて論じる力量が筆者にあるはずもない。手許に置いて何か困ったときには必ず参照する教科書『詳説 世界史B』(山川出版社、2014年、2021年度以前の学習指導要領に対応)には次のような記述がある。

中世末期の西欧では都市が発達し、そこから中世の文化を引き継ぎながら、人間性の自由・解放を求め、各人の個性を尊重しようとする文化活動があらわれた、これがルネッサンス(「再生

の意味)で、およそ14世紀から16世紀にわたってヨーロッパ各地に広まった。ルネサンスは近現代につながる文化の出発という側面から理解されることが多いが、中世の継承・発展という面もある。(205頁)

さすが定評のある山川歴史教科書である。過不足のない的確な解説となっている。参考書・入試レベルでは、文化史家のブルクハルト(1818-1897)が『イタリア・ルネサンスの文化』(1860年)で「ルネサンス(ルネッサンス)」という言葉を広めた、などの知識も必要になってくる。

福本の「ルネッサンス」は歴史教科書の理解を越えるものではない。常識的にルネッサンスの語を用いている。

ルネッサンス期の始期を1661(寛文元)年、終期を1850(嘉永3)年とする日本ルネッサンス史論の大きな特徴は、「学芸復興」と訳されるルネッサンスをマニファクチュア史論と総合して考察している点である。

『総論編』第1章「序説」には、その方法論がわかりやすく述べられている(以下、引用は『著作集』からである)。

さて、私のマニファクチュア研究の特徴はどこにあるか。(中略)私のいわゆる日本近世学芸復興期-日本ルネッサンス期における経済的構造の胎内にはらまれた反定是(アンチテーゼ)の発展としてこれをとらえ、いいかえれば、日本ルネッサンス史論の見地から、日本ルネッサンス史論の一部を構成すべき部分史として研究したこと(「反定是」は福本の造語-岩田注)。……その総合史たるべき日本ルネッサンス史の研究が、私のばあい総合・比較を試みたこと。(『著作集 第9巻』39頁)

あるいは、こうも言っている。

日本ルネッサンス史、日本マニファクチュア史の総合・比較研究の大成が日本の近世史を論じる上にもっとも重要にして不可欠の研究課題であることに世の注意を喚起したいと切にのぞんでやまないゆえんである。(前掲41頁)

ルネッサンス史と日本マニファクチュア史の関係は、マルクスが『経済学批判』(1859年)で提示した「土台(下部構造)」(生産様式、生産関係、生産力)と「法律的政治的上部構造、社会的諸意識形態」の弁証法的な相互作用を踏まえた史的唯物論に基づいている

(『経済学批判』岩波文庫、1956年、13-14頁、福本による「経済学批判」については第5章第3節参照)。

『技術史話雑稿』(1943年)、『日本捕鯨史話』(1960年)についてはすでに論じた(第9章第3節)。福本は『日本ルネッサンス史論』完成へのラストスパートの最中に、『日本工業の黎明期—日本マニュファクチュアの総合・比較研究』(全16章、未来社、1962年、前掲『著作集 第7巻』177-421頁、所収)を発表する。サブタイトルを見ると、『総論編』の「1661-1850年に至る日本ルネッサンスの比較・総合研究」と対になっていることがわかる。『日本工業の黎明期』は実質的には『総論編』の一部を成すのである。

「はじめに」の冒頭で、福本は執筆の意図を「日本工業資本主義成立前史としてのマニュファクチュアの成立・発展史……をなるべくわかりやすく、おもしろく読んでもらえるように物語ってみようというわけである。」(前掲『著作集 第7巻』187頁)と述べている。

なるほど、読んでいて面白い。内容は広範にわたる。議論の根拠として数多くの図版、データ・統計が用いられる。「あとがき」で「こんどの仕事はたいそう骨が折れた」(前掲420頁)と述懐するのは当然であろう。

第1章から第12章までは下記の各種マニュファクチュアの概説となっている。カッコ内は各種マニュファクチュアの主な地名などである。

鉱山業(佐渡金山、別子・足尾銅山、山陽山陰の砂鉄製造業、釜石製鉄所)、鍛冶・鋳物(倉吉の鉄製千刃稲扱、川口鋳物)、石炭産業(北海道・高島炭鉱)、沿岸捕鯨・遠洋捕鯨(紀州太地浦、土佐、生月島)、酒・醤油(灘・伏見、野田)、塩・砂糖・薬・ガラス、絹織物・生糸製造(赤穂、讃岐、周防、富山、西陣、桐生、小松、松任、富岡製糸場)、絹織物・綿糸紡績(足利、久留米、遠州、三河)、藍玉・菜種油・和紙・漁網・陶磁器(阿波、伊予、石見、伊勢、能登、有田、瀬戸)、茶(宇治、静岡、肥後、伊勢)、木工業・木造船(大阪、伊勢、水戸、佐賀、久留米、薩摩、長崎、石川島、神戸、箱根・小田原)、鉄砲・縫針(堺、近江、播州、関、広島、氷見、但馬・浜坂)。

第13章「機械発明家とその周辺」では田中久重(1977-1881、「カラクリ儀右衛門」として有名、東芝の創業者)、豊田佐吉(1867-1930、自動織機を発明、トヨタグループの創業者)、第14章「藩営・幕営マニュファクチュア」では絹織物、縫針、蝋燭、砂鉄、貨幣鑄造を例に挙げて論じる。第15章「比較マニュファクチュア論」では時計・製粉・製針・馬車・造船の各種製造業の日英比較を行っている。

第16章「指標と傍証」では、機械化される以前の各種マニュファクチュア（製銅、製鉄、製油、製糖、精米、製粉、製糸、紡績、撚糸、和紙機械漉き、製陶磁器など）の動力源としての水車利用、足踏式生産用具などを論じた後で、マニュファクチュアと運河の関係を指摘する。江戸、大阪、京都、仙台、名古屋、琵琶湖などの運河開鑿の経緯、日本とフランス・イギリスの比較は実に興味深い。

福本の歴史認識、すなわち「江戸時代の「人間と自然の発見」（ルネッサンス）→明治維新（不徹底なブルジョア革命、日本資本主義の進行、帝国主義国家へ）→絶対君主制下の2段階革命（ブルジョア革命→急転化のプロレタリア革命）」を想起してみよう（本稿第9章冒頭）。明治維新をブルジョア革命と規定するためには、江戸時代に資本主義の前身が存在しなければならない。マニュファクチュアの発展史を精査して明治維新にソフトランディングさせること。福本の図式を微修正して簡略化すると、「江戸期のルネッサンス（マニュファクチュアの発展を含む）→明治維新（不徹底なブルジョア革命）→2段階革命（ブルジョア革命→急転化のプロレタリア革命）」となるだろう。

皮相な理解では、福本の思想的立場はマルクス主義（福本イズム）から文化史論（日本ルネッサンス史論）へと大きく変わった（転向した）、と受けとめられる可能性がある。しかし、広義の福本イズムと日本ルネッサンス・マニュファクチュア史論の通奏低音は不変である。

福本は1983年の死の直前にも日本マニュファクチュア史論を発表した。『日本工業先覚者史話』（論創社、1981年）、『クラクリ技術史話』（フジ出版社（息子の邦雄が創業）、1982年、1947年に完成した原稿を出版）については後述する。

3 どのように読まれたのか

『日本ルネッサンス史論』の内容を論じる前に「どのように読まれたか」に言及するとは本末転倒のように思えるかもしれない。前代未聞のこの試論にどのように反応したか、を見ていくのは決して意味がないことではなかろう。いきなり読んでも「木を見て森を見ず」状態に陥るからである。

ここでは、高野修による私家版『福本和夫研究』（第9章第4節参照）所収の毎日新聞書評と同新聞の福本評、『著作集 第9巻』の「解題」（清水多吉）、『柳田國男の継承者 福本和夫』（前掲、清水多吉著）、『著作集 第10巻』の『月報』（田中優子執筆分）を取り上げたい。

書評「『日本ルネッサンス史論』寛文—嘉永190年に開花」（刊行直後の1967年10月6日付「書評」）は、ルネッサンスを文芸復興、学芸復興と受け取るのは狭すぎる解釈であり、マニュファク

チュアの発生・発展もルネッサンスの部分史である、という福本の主張を的確に紹介した上で、次のようにまとめた。

彼の執念といえるこの膨大な日本ルネッサンス史論に敬意を表するとともに、やはり、西欧と比較して、日本に根づよく残っている封建遺制の問題、またそれとも関連して、なぜ日本では西欧流のヒューマニズム、デモクラシーが開花しなかったかなどの点についてはこれからも納得のゆく説明がほしいし、これを契機に各方面での論争を期待したい。

(前掲『福本和夫研究』6頁)

書評子が日本ルネッサンス史論に満足していないのは明白である。「～に期待したい」とは書評の決まり文句である。実際のところ、「各方面での論争」は起きなかった。各章はそれぞれ数冊、否それ以上の研究書が書けるテーマを扱っている。タコツボ型(丸山眞男、前掲『日本の思想』129頁)の研究者集団の中で安穩と暮らす学者にとって、福本の大胆な仮説に対して論争を挑むことは、研究者としての経歴に影響しかねないのである。

『日本ルネッサンス史論』刊行から9年後、毎日新聞社記者の堀利貞による「「日本ルネッサンス」史論と取り組む“福本イズム”の主人公は健在」(1976年10月6日付)が掲載される。同年12月に『日本ルネッサンス史論の補足・総括』(和田一雄発行)刊行が予定されている文脈でこの記事が出されたと思われる。堀は藤沢郊外の福本宅を訪問している。「フクロウと独自の道」「全部知ってるので」「広くて深い研究成果」(3つの小見出し)について福本の弁を借りて記事を構成する。

「フクロウと独自の道」では史的唯物論者とフクロウの面白い取り合わせから筆を起し、27テーゼ、32テーゼについての回想が、「全部知ってるので」では福本がスターリンや徳田球一らの悪いところを全部知っている、と語ったことが記される。

「広くて深い研究成果」は日本ルネッサンス史論そのものを扱う。堀は訪問時の福本の発言を引用する。

「実はこういう史論がやっぱり政治問題と関係があるんです。それは、明治維新がどのようにして起こり、どのような性格の革命であったか、そして維新後に樹立された国家がいかなる性格のものであったか、という問題を十分に解明するためには、徳川時代にさかのぼってルネッサンスとマニユファクチュアの発展を確認し究明することが不可欠の前提条件になるのです。

それでは、明治維新と維新後の権力体系の性格究明がどうして必要なのか、というと、それは現在の資本主義社会を変革し、労働者・農民の解放をはかるための運動方針を決めるという実践的的目的を持っているのです。封建派というのがありますね。明治維新はブルジョア革命でなしに、封建制の再編成に過ぎないという野呂栄太郎なんかの意見がいかにも間違っているかということ論証しているわけです」

(前掲『福本和夫研究』8頁)

堀は「戦後出した30冊の著書はみな獄中14年間の“飢えた腸”(第9章第3節参照一岩田注)からにじみ出た産物なのである。」(前掲8頁)と閉じる。全体的にかなり好意的な文章である。

晩年の福本をよく知る清水多吉は『著作集 第9巻』の「解題『日本ルネッサンス史論』—わが座右の「エンサイクロペディア」」で、幕末をマニファクチュア時代と捉える講座派とマニファクチュア以前の間屋制家内工業の時代と捉える労農派の論争がいつしか尻つぼみになったことを指摘し、講座派、労農派ともに初期資本主義的営為の精神構造の分析に至っていない、との福本の批判に言及する。日本ルネッサンス史論は近世儒学(徂徠学)、石門心学(石田梅岩)を論じているが、ウェーバーが提起したプロテスタンティズム(カルヴィニズム)と資本主義の関係を想起させる、とも述べている。

驚くべき執念の追求。とはいえ、多くの人が指摘しているように、本書における経済史、技術史の展開と思想史の展開とが有機的に噛み合っているわけではない。これだけの人名と事項とを取りあげていれば、それもいたし方の無いことかもしれない。

したがって、私が本書を座右に置く理由は、日本近世の経済史、技術史、思想史の「エンサイクロペディア」として本書を利用するためである。このような利用の仕方なら、本書は絶大なヒントや、知的刺激を与えてくれる。勿論、この知的刺激には「共感」を込めた部分もあれば、「不満」の嵩ずる部分もある。

(前掲『著作集 第9巻』769頁)

清水は2014年の『柳田國男の継承者 福本和夫』の第7章「戦後の福本和夫の業績」によって2009年の「解題」を補足する。

……福本のこの『日本ルネッサンス史論』（1964年によやく出版—正しくは1967年、岩田注）は、あれだけ分厚いものであるにもかかわらず、内容が相互にバラバラなものが多く、しかも、その一つひとつの内容についてもかなり手薄なものが多いのも事実である。この著作を構成する一つひとつの章は、多分、かなり早い時期にまとめあげられ、その内容を再吟味しないまま、あたふたと1冊にされて出版されたのではあるまいか。（前掲『柳田國男の継承者 福本和夫』213頁）

おそらくその通りであろう。刊行は73歳のときである。当時、男性の平均寿命が65歳前後であることを考えれば、福本に焦りがあったとしても不思議ではない。全50章の各テーマを掘り下げれば掘り下げるほど、草稿はいくらでも分厚くなってしまう。しかも、福本は日本ルネッサンス史論に専念していたわけではない。マニユファクチュア史論の研究、政治的な言論活動も併行して行っていた。どこかで見切りを付けなければ、と思うのも当然だろう。

清水は日本ルネッサンス史論への具体的な「不満」について3つの例を挙げている。第1に、第6章と第42章で洋式造船・航海技術が触れられていないこと。第2に、第9章などで徂徠学が依った古学派・古文辞学派の主張の核心を説明しようとしていないこと。第3に、対外・国内戦争がなかった（島原の乱、幕末の動乱を除く）江戸時代に「兵学復興」があろうはずもなく、ありあまる漢文の素養が災いして2500年も前の『孫子』の解釈に振りまわされている第16章は不要であること。

清水は『日本ルネッサンス史論』を「駄作」と断じて葬り去ろうとしたわけではない。福本のライフワークの一つでもある葛飾北斎論のエッセンスを十分に盛り込んだ第50章だけでも、この著作には「大いなる価値」（前掲220頁）がある、とまで言うのである。

『著作集 第10巻』の「月報」（2010年3月）における江戸文化研究者の田中優子「『日本ルネッサンス史論』のかかえる問題点」はより本質的な批判である。

学生時代に本書を読んだときは圧倒された。それは、ジャンルを超えた横断的で極めてスケールの大きい思考と、「ルネッサンス」網羅主義の迫力であった。中でも、文芸や文化が技術史とともに論じられるそのことが、極めて魅力的だった。近世を論じるのであれば、このようなスケールを持ちたい、と思ったものである。（前掲「月報」6頁）

わずか数行の文章の中に、「極めて」という副詞を2回も使っている。最大級の賛辞だといってよい。

田中はやがて日本ルネッサンス史論から離れていく。「なぜ著者は西欧のルネッサンスを基準にものごとを考えるのか」という疑問を抱くようになったからである。

福本はもちろん、1661年から1850年の近世を賞賛しているのである。が、西欧ルネッサンスと似ている要素が複数あるから賞賛しているのであって、江戸時代独自の秩序やありようや価値やおもしろさを発見しているわけではない。(同上)

和辻哲郎(1889年生れ、ドイツに留学)と福本(1894年生れ、ドイツ・フランスなどに留学)には共通点がある。和辻の『鎖国—日本の悲劇』(1950年)は江戸時代を否定するが、欧米に基準を置くのは福本と同様である。

『日本ルネッサンス史論』は文化と技術、産業構造と学芸を一挙に論じようとする壮大な方法論を有している。文化や歴史の研究が狭小な分野に閉じていく中、限りなく広がっていく魅力を否定することはできない。

しかし、西欧崇拜の眼鏡をかけたまま近世日本を眺め、重要な役割を果たしていたアジア地域を無視したことによって(福本は例えば中国にはルネッサンスは存在しなかったと論じる—岩田注)、近世のダイナミズムを描くことができなかった。が、それほど強烈な西欧崇拜と近代崇拜を経なければ、今の日本はなかったのだと思う。また、西欧を知見の窓口としていた人々(主に戦前生まれのエリート層)のまなざしを近世文化に向けるためには、『日本ルネッサンス史論』は大きな役割を果たし、そして1960年代に、その役割を終えたのだらうと思う。(前掲「月報」8頁)

「西欧(欧米)中心主義」は日本に限ったことではない。とはいえ、近代日本に顕著だったことは周知の事実である。明治維新以降の「追いつけ追い越せ(富国強兵)」路線は、敗戦後には「強兵」が影を潜めて「富国」路線になったとはいえ、欧米にいかになづくか、が多くの国民の共通目標だったことは否定できない。第1次世界大戦から第2次大戦までに青年時代を過ごした戦中派が、経済、政治、文化などの西欧(欧米)中心主義に疑問を抱くことはほとんどなかったのではないか。西欧近代を超克(否定)しようが肯定しようが、西欧(欧米)中心主義という同じ土俵の上での議論に過ぎなかった。

21世紀に生きる私たちにとっては想像できないが、かつて「強烈な西欧崇拜と近代崇拜」が存在していた。では、田中の論じるように、「『日本ルネッサンス史論』は大きな役割を果たし、そして1960年代に、その役割を終えた」のだろうか。

福本は『日本ルネッサンス史論』で何を語ったのか。具体的な内容を見ていくことにしよう。